



七部集  
替みの  
三

共七



晉其角序

鄙諧乃集つくる事古今より  
わらわらけ道れおまへ起通  
き時たうれや幻術の事一や  
しつろれ白り魂る入さ通  
えゆえよ格あさるに似る  
通一久一一世よ〜まらり  
ま〜んよ〜らりてる愛及れ愛



Handwritten characters on the right edge of the page, possibly bleed-through or marginal notes.

を志し五徳のつやを及ん  
びんをさくつに画きぬ  
こたり彼あり上人の骨  
てんを作つて輝く純  
多き笛を吹やうになん結ぶ  
とりさ純なる人よ成て結連  
如も五の輝のまじりて結は  
及魂乃法れをあらうこのよ侍ふ

屋あましたまうる代入  
くアイウエシらくひま  
いふゆゑん吟輝をあめ  
し只蹴踏も魂代入  
まところとて我翁行脚乃  
伊加越しちり山中  
後より小養を看せし蹴踏  
乃神を入ぬまの今純をた

ちまも新腸たむきんを呼  
ひも神あつに懼る人まひ  
術たりしれをえりしは  
集をつくもく猿そのい名  
付たりし建ちる是く序まそ  
れらるるり魂を合せし素  
元兆乃ほ一ちたりよまら  
書

猿蓑集卷之二

冬

初し我猿を小蓑をほけ也 芭蕉  
あまのけをほるまの夜猿の 其角  
時多しや並ひしは 新し 千那  
幾人くし我のあつ田代橋 僧 丈州  
越持の杉振らるし 膳所 正秀  
屋浪やらしめり 史邦

舟人のあつこきこころのつらさ  
尚白

伊賀の境より

やうらやうら長の磯乃一時雨  
曾良

時多しや早ふつ心屋の窓あり  
凡兆

了らそ竹田の里や坊し  
乙羽

多すまされ早ふの光や小夜時多  
羽紅

新田の稲殻焼く  
昌房

いづれや沖の河をたき帆片帆  
去来

もろおとよけや北平代早ふのふ  
百歳

いづれも動く地をまきおれ  
野水

後

いづれもにほとけし船の中  
其角

歸るはるはる志ん途切し  
同

禅もたきのふはるかや神守目  
凡兆

百舌鳥のあつこき心根よ十月  
嵐蘭

かゝりや頬腫痛む人の影  
芭蕉

伊賀

膳所

大津

かよひを延きけりての冬もまを 元兆

たのしみ

掉麻のうさちゆら枯ゆられ 土芳

流掃をわらうて過るし夜分 裾道

ちやのうらやしうらうら女 越人

まのむほきあまゆふおきり 猿錐

古ちれ養子もあきりて冬もまを 元兆

公羽の登田よ軍船をいひて

雑水のかさうがうは冬もまを 其角

こ乃多き牡丹のふれんまの裸 車来

草津

あひまをさうらうらうのこくれ 尚白

神逆水はまらうらうははら 珠碩

霜月菊且

梧まらうらふよ物あし 赤指 良品

水月れあを移しや水仙ふ 不玉

part

三

伊賀  
羽後留  
伊賀  
伊賀

今世をさるるのしき一も其の跡

尾張 貝葉

尾張のころのころの海風

伊賀 去来

一、後くさむき海風鈴干草

探丸

〜ら〜らに又賀其音井の音

江戸 尚白

茶湯〜ら〜ら目も極く

龜翁

炭竈よる負れ杭の倒き

凡兆

住つらぬ轅のころや赤火燧

芭蕉

寝ころや火燧蒲團のころ

其角

山前此小舟もあうぬを至哉

凡兆

木兔や坊まい切る昼れ雨

尾張 苾境

〜つ〜ハ眠る中をさるる

伊賀 半残

### 貧交

ま〜らるる孤子れ切を譲り

丈艸

浦風や巴をころすし

曾良

あ〜儀や〜る刻も交衛

去来

狼のあ〜踏消すや濱千鳥

史邦

背門口乃入江よのほるちちるれ 丈艸  
いし道々雪よまききて鳴千鳥 千那  
矢田の神や浦のあつれは鳴ちちる 允兆  
筏されたんころ跡や鴉のち 本節  
水あをさうてまゝ魚の小鴨哉 丈艸  
ちんちんも寝たをわさる余吾の海 路道  
死まて採成らん鷹はるか 景藁  
襟まきり首引をく冬れ月 秋風

あ本戸や鎖のさされて冬れ月 其角  
かゝちりれ浦園くちりやみちの環 長崎 暮舟  
見えさるん旅人さし 石部山 大津尼 智月  
翁は御れおのまの衾をとあま  
らる詠あり略く  
首出してさう香をんちりやけ衾 義濃 竹戸

題竹戸之衾

五つめハ我のまけあしそ紙衾 曾良  
魚のけ糶乃やちせがさ秋江 探丸



志のこゝに教珠の取の字 網袋書 史州

青白砂を候す

藤つこよのしこまらり居る霧のれ 史邦

桜樹の葉は霞よりあはれ 野童

鶺鴒乃橋よりわたりしす 雲散のれ 伊賀 示蜂

呼ふよと射賣つんまぬあはれ 凡兆

こころれ海よりや朝飯のせぬ 膳所 晝好

こころや内へ居らるれ人へ傳 其角

初雪よ雪部屋のうく 朝朗 史邦

おれやげのよ風吹くやも 雪晴 羽紅

わらもりの凡そ松のこ 野童 探丸

下京や雪つむしとほ 夜れる 凡兆

わらと川一筋や雪の原 同

信濃路をよる

雪ららや植屋に雪の川 芭蕉

草庵の雪に

妻老ハ髪もあけと巻れ也 其角

尾張

ちた目ハ竹の子筈うはさりたる 羽笠

長崎

汗よも縫あつハちり結もい 卯七

いりりてちやちりあつて 去来

青亜追悼

乳のこもに世を渡りも隔た 尚白

うも髪も元也の慶もきれ也 芭蕉

餅や記憶ハ顔も似ぬさつ 乙卯

一月ハあまも来りてらるる 文州

住吉奉納

夜神糸や鼻息白一面の内 其角

伊賀

節季候よ又のこもきしめ 須球

同

あやうらにやまもい 拵甫

乙卯 新巻

くの家をこころせとあふ年忘 芭蕉

弱法師 家門ゆき餅のれ 其角

歳の夜や曾祖文をゆげふ多枕 長和  
 今す望れ一室の秋あやしの香 去来  
 くらきてゆき事始まらばや伊勢の 同  
 大と一やもれまらねる人とも 羽紅  
 やらとねく又もまらねる年暮の層 其角  
 い孫のこくふいもまらねる年暮 路通  
 年のく我破き禱に幾とくあり 松風

猿蓑集卷之二

夏

有明の面はくすやにけりもみ 其角  
 夏ふすこもまらねる年暮の時鳥 木高  
 那も様よとくもまらねる年暮 芭蕉  
 時鳥やけりもまらねる年暮 尚白  
 けりもまらねる年暮の時鳥 凡兆  
 けりもまらねる年暮の時鳥 智月

蜀魂たぐや木の角櫓 史邦

入おれしきの中をにき 羽紅

にほひに際ふりかみちのれ 文州

ふかき代官殿やけしき 去来

こし死を我塚てふけりて 遊女 奥刃

松尾一見のあまのこころを  
玉露の毛衣さよあられを

去鴻や玉露よ身をくれけりて 曾良

ふもいぬをさけりけりて 芭蕉

旅館庭にさし  
庭草をさす

あつ桐葉つらよあをさけり 膳所 曲水

四月八日詣慈母墓

あつ水さけりけりて 其角

あつ水さけりけりて 全峯 江戸

別僧

あつ水さけりけりて 越人 ナシノハナ

あつ水さけりけりて 珠碩

翁は休られてすまふ

亡人

似合しよけりこの島は

杜國

まるとさき白むけりけのま

嵐蘭

井れすきよしくしり杜の

半殘

起ぬくゆまきりね

船の回乃

起くのこころは

仙化

題去來之端峨洛柿舎

巨極の初の本魚屋を

元兆

破垣やわし麻子代が道

曾良

南都旅店

誰のこころは

千那

洗濯やまのこころ

尾張 傳定

豊國よて

竹の子れ力を

元兆

多げれ子や白濁り

去來

たけのこや稚すめ

芭蕉

猪ノ吹入さきくさきく丸 正秀

明石夜泊

晴きやしむれよ夢城支月 芭蕉  
君の代か箱磨奈を鍋一川 越人

五月三日

しんまーさるやそ

石のま目とまきくさけの高浦也 其角  
粽結ふかきくさきくむ額髪 芭蕉  
隈篠の廣きふくさきく餅粽 岩戸翁

さきくさきく客人やまきくさきくりか 尚白

五月六日大坂より死の  
遠忌を吊ひしり

大坂や刀のぬきぬき夏乃み十逢 蝉吟

伊賀

奥羽高館より

葦草や兵九つゆ先乃跡 芭蕉  
這出よかし屋下此蟻の新 同

け境をいひしりさきくさきく  
こころ事しり

かきくさきく角かりまけは次平の石 同

五月あゝ家あり控てありし  
元北

し孫妻は味なもやわりぬ  
末節

るとの謂はありさつと雨  
史邦

奥羽名取の郡よへて申す  
の塚はいつくやと存す

道より一里まはりたり乃方  
笠落しつゝ

わつとまはる五りぬ  
あつて

笠落やいつとみればぬり道  
芭蕉

大和紀傳のさういふ  
て往來の形を

すめらみ六科  
紙のくに書つて

つらりのとらぬ坂やみりぬ  
去來

發利や一夜今情みりぬ  
元北

目の道や羨れくさ月あわん  
芭蕉

種地や若もさくはりぬ  
羽紅

七十余の老醫今まらり  
にいつくの白をけ  
いさうなりし時  
る人よあつた  
わつと

けしき年よさうとてとてとて  
ゆのさうわらきとて

六月の力や五月あか 其角

百種も妻よ取つく茶摘可 去来

志くもや茶山よはまぬつれ 正秀

つみ合子あはけや妻白鳥 游力

孫と愛しと

妻を余れ家しとやらん雨蛙 智月

妻あまて體道吟よとやぬか 花紅

志く川の関とて

月流のくもや奥け田挿うと 芭蕉

出羽のくもとあまて

眉掃をよ面影よとてお粉のま 同

法隆寺南帳  
南無佛の志子を拜す

法袴あまきなうと名粉のま 千那

田の畝けをうらひり 伊賀 万手

膳所曲水之樓とて



螢火や吹さらけまじりし鴉のやま 去来

夢田乃螢火二句

闇の夜や子を泣かせと螢のひ 九兆

ほろろんや船歌酔てあつたれ 芭蕉

三徳野へ清きもの時

螢火やこゝろうろくま八鬼尾谷 田上尼

あめららよ精と下りあふぬも 尚白

草むしや百合の中こころの魚 半残

病後

おつちやかしらあつてく百合のみ 何処 大坂

すけやあふりあふる百合のそら 乙羽

穢蚊辭を作つて

子やなん其子の母を蚊の喰はせ 嵐蘭

餞別

ととよや蚊屋のうらぬ旅の宿 里東 膳所

うらぬ人よつね 系書するは者よこれに下り

不<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>夜<sup>ニ</sup>を<sup>シ</sup>昔<sup>ノ</sup>冠<sup>者</sup>よ<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>角

降<sup>ル</sup>雨<sup>ノ</sup>や<sup>ハ</sup>蚕<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>生<sup>ル</sup>く<sup>ハ</sup>耳<sup>ノ</sup>乃<sup>ハ</sup>穴<sup>ニ</sup> 文<sup>州</sup>

下<sup>ノ</sup>宮<sup>ノ</sup>や<sup>ハ</sup>比<sup>叟</sup>な<sup>ら</sup>ず<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>蟬<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup> 嵐<sup>雪</sup>

客<sup>ノ</sup>より<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>指<sup>ノ</sup>を<sup>ハ</sup>か<sup>へ</sup>ゆる<sup>ハ</sup>船<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup> 膳<sup>所</sup>探<sup>志</sup>

影<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ら</sup>ず<sup>ハ</sup>ま<sup>る</sup>ん<sup>ま</sup>ず<sup>ハ</sup>船<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup> 芭<sup>蕉</sup>

表<sup>ノ</sup>と<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>音<sup>ノ</sup>麻<sup>州</sup>の<sup>ハ</sup>あ<sup>の</sup>は<sup>は</sup> 槐<sup>市</sup>

渡<sup>リ</sup>ぬ<sup>く</sup>津<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>花<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>流<sup>ル</sup>哉<sup>ハ</sup> 元<sup>兆</sup>

舟<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>妻<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>唱<sup>ノ</sup>奇<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>合<sup>ノ</sup>歡<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>花<sup>ノ</sup> 千<sup>那</sup>

白<sup>雪</sup>や<sup>ハ</sup>鐘<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>音<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>れ<sup>夕</sup> 史<sup>邦</sup>

素<sup>堂</sup>之<sup>ハ</sup>蓮<sup>池</sup>邊

白<sup>る</sup>や<sup>ハ</sup>蓮<sup>一</sup>枝<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>拾<sup>り</sup>て<sup>は</sup>ま 嵐<sup>蘭</sup>

日<sup>ノ</sup>燒<sup>田</sup>や<sup>ハ</sup>鳴<sup>く</sup>く<sup>ハ</sup>蛙<sup>ノ</sup> 乙<sup>羽</sup>

日<sup>ノ</sup>入<sup>者</sup>と<sup>ハ</sup>鹽<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>底<sup>ノ</sup>に<sup>ハ</sup>蟻<sup>ノ</sup>れ<sup>ル</sup> 元<sup>兆</sup>

水<sup>を</sup>月<sup>ノ</sup>も<sup>ハ</sup>鼻<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>影<sup>ノ</sup>を<sup>ハ</sup>公<sup>ノ</sup> 同

日<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>曇<sup>り</sup>と<sup>ハ</sup>わ<sup>く</sup>果<sup>と</sup>牛<sup>ノ</sup>け<sup>台</sup> 正<sup>秀</sup>

ま<sup>る</sup>く<sup>ハ</sup>鼻<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>影<sup>ノ</sup>を<sup>ハ</sup>公<sup>ノ</sup> 木<sup>節</sup>

53E

13

志のこゝろを較ゆくはるもつし

野童

夕のこゝろをわらわはるもつし

羽紅

青草の湯入をわらわはるもつし

巴山

千子、あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつた

千子のこゝろを今や青草千

芭蕉

水は月を朝りつらわつたつた

嵐蘭

宗次

宗次

下はちや新やまのつたつたつた

元形

唇よきまつつたつたつたつた

千那

月録や思ふ乃歌徒馬鞍

曾良

夕のこゝろをわらわはるもつし

去来

~~~~~

~~~~~今のこゝろは比叡の地

大坂  
之道

猿蓑集卷之三

妹

桃風や蓮なち〜よ花一

不知  
讀人

此句東氏〜ゆき

素堂

かひくらのめけ初〜齒や秋の風 秋風

芭蕉屋〜何よおれや妹の風 路通

人よ似〜接のま〜細社〜せ 珠碩

三

三

加賀乃全昌寺に宿す

終夜枯のきくやまのこ  
 曾良  
 芦原や踏鳥の寝ぬおとけの風  
 山川江戸  
 あまのちのや鬱令留れ枯のり  
 九兆  
 川露や枯の外芝の起あり  
 去来  
 大比叡やこゝぬおの葉のよめ  
 野童  
 こゝらうて踏ふあなや和の雷  
 九兆  
 文目や六りもなみの夜よぬす  
 色蕉

合歡のよれ為あういよ早あけ 同

七夕やあまのりいふくろあへし 杜若

伊賀小舟

こやこよの信なうくせり相撲取 去来

伊賀

朝うほとち寝るあめはらりし 風姿

膳所

雲やあつこの憂れはれぬす 及肩

笑のほほよ色よまは木槿の 嵐蘭

まな無くやとるり木槿の 秋風

さか花のくさぬもくばくれ 千那

まきのねのぬあまのきやぬ殿雨 史邦

そよぐや敷のゆらりゆあじ 且兼

枯風やよのほろくしきしきす 子尹

逢ひ子の親めくろやすきま 羽紅

八瀬おりにあましりて業  
うらの文あけの序あま

まよきく揚乃先代殿らぬ 凡兆

つらつらりくろくろくはら  
ふらふらおせにかて

思ふよのまの感一もれ殿 去来

草刈よりけり思ひく三枝のお路 李由

平田

え禄二年公頼又伏せしき  
とちのくくろく三越後よわり  
り柳くくろくよかの國よて  
よかりゆりていせまてえ  
まて

いつくまたれ即も秋のま 曾良

相のまにぐくつづの癖の用 色蕉

百舌鳥あくや入日さう 女松系 凡兆

初層よけ然るれまて 亡人 落

望田より

病属れ後さしよあて瘡あ 芭蕉

海との舟よ小海老よあ 同

加賀の小寺と云ふ又々田乃  
神社の宝物と云ふ  
うさぎ草乃云々同  
錦のきれきをさし  
うさぎのあしり懐くおん

ひんや甲のよれきりくす 芭蕉

采島や二多子あ中の世あ 尚白

こころや物よまの夜月よ 風巻

こころ

葉月や名鶴よ海人あ 千子

こころ月にあのあしりあ 之道

葉釋と月を皮あらぬあ 半残

月えせん体見のあ乃あ 去来

公羽を芽舎よ

伊賀

ねもころ松笠あのあ 土北方

加茂よ詩志てよ涙のこぼれ

ちるあこのやうにけりや  
まつとてよきや

月詠や拍手のうらや 膝のよ 史邦

友達の六條よわらうらうら  
さうさうさうさう

伊賀

影やうたふさるる朝月夜 卓袋

しやんばやあしうしうの詠 乙羽

京筑紫を身なれ月うら信申者 文州

明けの相もやうさよ月一う 元兆

ゆらゆらとあつた月つる 高白

向の能うさるの月うら 曾良

え禄二年つらうれ  
月をうらうらと氣比の明神よ  
信をうらうらと

月詠一むらさきのよ 芭蕉

仲殊の初至猶子を送る詩

うら夜の月もあつたよ 去来

明月やあつた寺は茶はあつた 昌房

膳所



月ツキをツキままるる人のひとのの破やぶははららるる  
僧正そうじょうののいいままよよのの小こ屋やははををめめたたしし  
初瀬はつせやや鳴なづづのの浪なみのの花はな折をり糸いと  
一戸いっこやや衣えももややままここももしし人ひと  
釋しやくのの輪りんへへるる迹あと——いいままもももももも  
徒糟たそうややかかくくもものの喰くりりはは荒あ島しま  
ああややままりりててききここうう地ちのの鐘かねがが  
嵐あらし蘭らん

一鳥不鳴山更幽

物のもの音ねららりりたたららるる葉はははららるる  
ししつつ——きき拍はくののいいままもももももも  
旅枕りょしんののつつとと合あ軒けんはは下した  
鳩とよ々々やや流なが柿かき糸いとのの蕎そば麦あわ白しろ島しま  
ととししやや下したののささやや花はなのの糸いと  
鑿くわ釣つりひひののもももももももももももももももも  
わわああのの向むかひひののふふすす通とほりりををううるる高たか島しま  
茶ちやをを切きるる跡あとままりりののいいままもももももももももももももも  
其その角かく

きよきよに鶺鴒の鳴き声きこえられ 珠磬

このひびきやのこもるは桐の秋 土芥

稲うらゝ母よ出立ぬるまゝに 凡兆

自題落柿舎

花めりや竹ちらきあらし 去来

志しほひかけしつゝ橋のしほれま 塵生

肌さし竹切しのすす五葉 凡兆

神田みよ

まはらうらうらこれのあはれあはれ

神田みよの鼓の音 蚊足

あはれあはれ

さびしき大なるをまうら 嵐雪

しねの四五日弱きすまきか 丈艸

まきしねの夕や月がら 凡兆

世の中、鶺鴒の屋乃し 同

塔臭れ齒よこさしや好の音 荷分

猿蓑集卷之四

春

梅咲てくか怒乃悔もあり

露路沾

上臈の山莊よりうつくしき

候しきりりて

梅もあや山路稱入るはゆき

去来

しん香やふ入異牛の角

白空

加賀

庭真

梅の香も山利も流す谷真

土芳

しつ疎を中やききある梅のみ 半残

梅の香や酒のしほけあはしき 膳所 蟬角

しほのあやけ一筋を路のほろ 其角

子良鼓のほよ梅もよき

清子良子れ一そと一梅のふ 色焦

瘦女敷や作りたつ我の軒の梅 千那

仄捨て白梅くしむ垣縁のれ 凡北

日當りし梅吹くらや屑牛房 膳所 支幽

暗香浮動月黄昏

入桐の梅よちりり 風麦

武江よめともしく藤亭の 残草

寝ころもいさの桐園や園の梅 乙羽

辛末のしほなせのしほめ  
ついでしほのしほよは日くらきし梅  
のしほのしほをしほありあわれの回友  
宿忘るらんぬあやのあや白しほ  
あやのあやのしほを日くらきし梅  
事れやらのしほのしほのしほのしほ  
あやのしほのしほのしほのしほのしほ  
あやのしほのしほのしほのしほのしほ

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十

夢さして又一句のちもほら梅 嵐蘭  
百八のしほてはしらや園のしめ 其角  
ひらり寝の能宿らしくおひ目 去来  
野田や序巻のしく摘る葉 史邦  
くつらやちよふ漕まのよ葉松 嵐南  
香たひ梅さくらなみのいかに 如行

憶翁之客中

裾りて草をよしくちん草枕 嵐雪  
つとしく踏ふかきもあは 路通  
七種や跡より朝くらす 其角  
家やち寝のよけ根芥子 丈艸  
うすしちちのしほる花のふ 其角  
脈よき花をうまに日あはれ 同  
新しきもいぬいぬは揺ちり 去来  
鶯のち踏さるす垣植られ 一桐

伊賀

雪やしら雪一みりれ志しりふ  
江戸 溪石

うらふやを海あしれくし  
其角

鶯や下駄の齒よつく小田れ上  
几兆

雪や窓よ久ちをさすんあし  
魚日

やめの雪柳もくらすく  
探丸

けし溜はきよめ持へき柳れ  
ト宅

垣くはくへてくれし柳水  
遠水

くく川極変れよ柳れ  
尚白

青柳の志しれや鯉の住所  
一噴

雪けや鈴いす場乃す  
木白

待中乃正月もくやうら月  
揚水

回たぬよとして

雪やしら雪一みりれ志しりふ  
芭蕉

うらふやを海あしれくし  
越人

雪や窓よ久ちをさすんあし  
去来

雪路はくく餘寒の當座

青のよもぎ あまのつばき 白羽 あまのつばき 龜翁

おのよもぎ あまのつばき 尚白

出らりや あまのつばき 龜翁

と あまのつばき 風雪

骨 あまのつばき 凡兆

白 あまのつばき 其角

人の あまのつばき 尾張 松峯

ま あまのつばき 元志

陽炎や取つ あまのつばき 上 荷分

あけ あまのつばき 百歳

うら あまのつばき 土方

は あまのつばき 氷同

野 あまのつばき 凡兆

ふ あまのつばき 色蕉

いと あまのつばき 伊賀 配力

物 あまのつばき 嵐雪

彼岸の人とむさる一夜の夢  
路通

よのしりや帝たありとて涅槃像  
野水

花並ぬ裏ハ燕乃かうい道  
九兆

立さうく今や紀の戸いさの扇  
伊賀 沢維

春の女や屏のふ草ふ花はあぬ  
嵐虎

うよよ下して

よもやうりゆるさう法門  
猿維

不性と金かき起され春のぬ  
色蕉

春の女や田舎のふれ雛賣  
史邦

こころのあはれや軒まゝ花  
羽紀

泥垂や西の女の瞳うらみ  
史邦

蝶こころの本舞の竹や虫の糞  
昌房

振袖や下座よりよき去年此雛  
去来

春の女よこすれ雛の想籠のふ  
伊賀 萩子

桃御くらりありとやをんあれ子  
羽紅

うらむれま境さのふれ雛  
三川 鳥巢



里人の暗居しむる田畑られ 嵐推

蝶のまじりて一夜寝よらるる夢のほ 加勢山中 半残

帝の鳥切て白根の嶽をの染む 桃妖

いのちのりこころすむや療 伊賀 園風

日の影やこころれよの親すめ 珠碩

花の結ぬむすめよのすめや縁の先 土芳

南の夜や果なるころころとあけ 芭蕉

越より飛来しゆくて縁の  
ついでのちやまじりて道す

きこらぬり  
とまらぬり

鶯の巢の樟の枯枝よ目みぬ 允兆

うさぎのうらみとるるそよの 伊賀 石に

子や待ん餘りきくたのきあり 秋風

いづらあけ申れ拍子や雉あや 芭蕉

芭蕉卷のちよきま訪

蓮草小鋸はしあやとれ 曲水

木尻筋旅しゆくてとるる拍子あり 江戸 山店

畫讚

山吹や夕日の焙炉は白く待

芭蕉

白玉は雪のよきつらく様くれ

車来

わらわらわらわらわらわら  
あつたれは髪けりつらんもめ  
しつらつらつらつらつら

竹もろくそ昔やちり様

羽紅

鴨半おしよ下もくしき部

坂上氏

津國山本

うしろの笠やうらも様

芭蕉

しらしらしらしらしら

伊賀

利男

東叡はまらぬ

小坊まやまらぬしつら

其多用

一枝はゆめはうらうら

尚白

雛のぬもめいゆかや様

凡兆

まきんよらん枝まらん様

丈艸

馬羽のまらくはくはく

史邦

中斎よらうらうらうら

千那

葛城のぬもこをさるる

ねるるやまのぬり神の顔 色蕉

いりの國花垣のなはうの  
あはれ乃ハを橋代新よ附  
らさるるると云傳へんらん色  
蕉

一里ハこれ花亭のふ縁や 同

云々の墓東武谷中にもうた  
三歳して死ねれ九年の及ふ  
城よりしるぬ墓のおよ橋柱垂  
ゆるり一わひくぬれ抑うこ  
つててうれ橋をたつて後うよ  
他の墓程さうく笑もれはさる

まうやちの吸ふ煙の往還 園風

知人よあまうこをありんれ 去来

あま僧の煙り一あめ熱いれ 凡北

浪人のやうさく

嵐を帯の夜あれう花靨 半残

野もこりれを中絶いよへ外 長眉

これの奥もや  
うの口はくはく

大等やうれ奥乃あめ果 曾良

道灌山よのけしき

る滝やまをくみのびをうけり 嵐蘭

源氏の強きとんこ

標子に夜らるまれまじし 羽紅

庚午の歳家をと替へ

加筋

綾よりりしきまゝの花はらりけし 北枝

いしりらるや伽藍の樞やけり 凡牝

江戸

海棠はれしき満より夜の月 普船

大和の脚乃しき

草即ちやちるはれぬのま 芭蕉

しきや躑躅ふけり尾のひび 探丸

やうくし海よるくまや夕日影 智月

兔角して卯まつちし縁をひ 山川

佐賀

鷺鳥のおきまうらうらりりし縁を 式之

木曾塚

其よの石のちのけしきをたると 乙刃

春風後きくねお殿の堂を乾 曾良

望湖水惜春

ゆききつをふりておのれをさるる 芭蕉

猿蓑集卷之五

去来

鳥の羽を刷ぬまへて

カイツツロヒ

一ぬきしはれぬよの屋を志す 芭蕉

股引の朝はぬきしはれぬ 允兆

たぬきしはれぬすは襦袢のら 史邦

まじりてはれぬ遠く家書は月 蕉

くよもくれす名物乃梨 来

邦 兆 来 蕉 邦 兆 蕉 来  
 三 里 あ ま り け 道 う ん け る  
 吸 物 と せ ぬ 身 だ れ 一 日 見  
 笑 容 だ れ の し め と ち る  
 ほ り せ じ ゃ ん 去 年 の 孫 こ の 孫  
 甲 子 年 卯 子 年 の 貝 ぬ ぐ  
 何 事 も 昔 の 日 に 志 づ け ち  
 し じ ゃ ん ち ゃ ん ち ゃ ん ち ゃ ん  
 ち ゃ ん ち ゃ ん ち ゃ ん ち ゃ ん  
 ち ゃ ん ち ゃ ん ち ゃ ん ち ゃ ん

邦 兆 来 蕉 邦 兆 蕉 来  
 こ の 春 も 盧 門 の 男 孫 ち ゃ ん  
 う 一 日 見 月 の 夜 夜  
 笑 容 だ れ の し め と ち る  
 し じ ゃ ん ち ゃ ん ち ゃ ん ち ゃ ん  
 い ち じ ゃ ん 二 日 乃 地 の 陰 下  
 ち ゃ ん ち ゃ ん ち ゃ ん ち ゃ ん  
 ち ゃ ん ち ゃ ん ち ゃ ん ち ゃ ん  
 ち ゃ ん ち ゃ ん ち ゃ ん ち ゃ ん

渡舟けまゝに起る力なき  
陸をとりて車引こむ  
うまをを担穀垣より  
いさや別の力より出す  
せうけい端てうらま  
ゆきい切るをうらま  
青天よ有明月の影りけ  
湖水の秋乃比良たらしむ

蕉 来 邦 兆 来 蕉 兆 邦

紫のや蕎麦のすまは歌をよ  
ぬのこ若智ぬ月影夕る  
押合うて寝くは又きつうわ  
よられ中乃まゝの赤き  
一掃鞆つくる意のこれ  
枇杷の古名にまはるる

邦 兆 来 蕉 兆 邦

去来九

芭蕉 九  
凡兆 九  
史邦 九

凡兆

市中ハ物のよほら也其月  
あししくこころ乃勢 芭蕉  
二番草一取の果と種よき 去来  
灰とらとくくあ一枚 兆  
け筋ハ銀のえきす不自由は 蕉  
たきとらに長と短指 来



草村は蛙こはるのうまき道  
落乃せきさりにちねいす  
道心のねらひあはれつるむ時  
能やれ七尾の冬は行ふき  
魚の骨志りたる道の老残を  
待人へく小浜の鏡  
まより扇風を倒す女を  
湯後六行の筆子儼し

蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

苗香はまると吸落すの嵐  
傍やとしく寺りく人  
さる引の橋をせとけり梅の  
名 年一に一年の地子もや  
五六七とよつらふ家儲ミツタリ  
足袋少くも黒ほふる  
追ふ早よ侍る乃刀持  
了らるる何よ水にほり

兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆 来

戸障子もむらむらの雲を  
 へんききまきまわらうらうら  
 こころの草鞋をひく月夜  
 雲をこころよ起し秋  
 そよまのこころの秋  
 ゆきゆく蓋のあつむ半  
 草履は折るてはるや  
 いのちなき探集れま

来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉

さいまきこころの秋  
 は母の果を皆小町ちり  
 きたるう粥すまの海  
 はらぬらとちりる極  
 むねの風を遠くま  
 白雲のこころの秋

来 蕉 兆 来 蕉 兆

凡兆 十二

芭蕉 十二

去来 十二

凡兆

灰汁桶のきやどりきり

あゆみのりくも自寝す 秋 芭蕉

新玉あかりたる月けよ 野水

あへて嬉し十乃とらも 去来

糸代舞へき物を振く子日へ 蕉

雪の音にたりし雪の音 兆

葉出して眩は餘る其りの物  
 摩耶のうらむねはさめれうねる  
 中よりにうらむねはさめれうねる  
 怪のうらむねはさめれうねる  
 さめれうらむねはさめれうねる  
 座口さめれうらむねはさめれうねる  
 金鏝とくさめれうらむねはさめれうねる  
 あらむねはさめれうらむねはさめれうねる

来 水 北 蕉 来 水 北 蕉 来 水 北 蕉 来

町田の村の文はあやう  
 何んぞあやうな子にうらむねはさめれうねる  
 さめれうらむねはさめれうねる  
 本よりれあやうな子にうらむねはさめれうねる  
 名  
 うらむねはさめれうらむねはさめれうねる  
 葉はうらむねはさめれうらむねはさめれうねる  
 さめれうらむねはさめれうらむねはさめれうねる  
 旅の地をに有るうらむねはさめれうねる

来 水 北 蕉 来 水 北 蕉 来

丁に侍も女は皆意もいふ  
何れもいふは根乃ちた  
夕月夜長の管のたはた  
人のちよわくあるそあ水  
うそつは自慢いそくおほ  
又もたふは都ををいふ  
堤より田の音やきついで  
かき度乃やうくは独と社あり

来水 蕉兆 来水 兆蕉 来水 兆蕉

抱うりた尻をさく名乗すそ  
雨のやうりたさき一迅速  
層祓より春踏のたはた  
志らく水は菖蒲うららん  
糸橋板いれいよははら  
其れを三月曙乃ちう

来水 蕉兆 来水 兆蕉 来水 兆蕉

九兆 九

芭蕉 九  
野水 九  
去来 九

餞乙卯東武行 芭蕉

梅の影をまわりこけ有のさうけ  
かたあやうしとて其人の様名 乙卯  
五云存ありくお田よ土持はるれや 珍碩  
志しき程よてりよれよとよ 素男  
片隅よ虫歯くえて居るの月 刀初  
二階の窓よとれよとあき 蕉

放やううううた跡はるるの草  
 編の屋迄乃力なきうせ  
 ちうしんた初まにける終幕と  
 心発願と叫びるはれ  
 卯の割乃箕身に並ぬ中め方  
 すすまきる木の志のうかり  
 萩のれううのれよこまて  
 若うううう百舌るるの一勢  
 男 碩 蕉 刃 碩 智月

懐よまをばあやむる雉の月 凡兆  
 けさうまうぬあのはつら 刃  
 鏡の柄よまをうらむるふのれ 去来  
 灰まきうらむすおりの跡 兆  
 喜れ目よはまきてくる孫机 正秀  
 店屋あうう休のまうかり 来  
 汗あうう踏のまうの跡の糸 半残  
 うれせううまの雛乃下 土芳

大膽よもきくしむるはなは  
 身われ御の取所 芳  
 小刀乃 鈴又なる 細工も  
 棚よ 火とりす 大年の夜 園風 残  
 ういふと ねよ 使も 後戸の 櫛 接 雖  
 りの け 合せ 老るる 如き ぬ 残  
 此も のれ ちを ころる 破 解 風 雖  
 碧油 絲を せき 志す 月 見 雖

咳 疾の隣 いら とも 縁つ とも 芳  
 流 八つ 一は ころる ころる 顔 風  
 形 ちの とも 踏を せ あり みる 金 持 益 嵐 蘭  
 う する とも ちる 舟の 割 下 結 史 邦  
 花 ちの とも ころる けつ とも ころる 野 水  
 雛の 被 色 深る とも ころる 色 羽 紅

芭蕉 三



|    |   |    |   |
|----|---|----|---|
| 乙羽 | 五 | 土芳 | 三 |
| 珠碩 | 三 | 園風 | 三 |
| 素男 | 三 | 猿錐 | 二 |
| 智月 | 一 | 嵐蘭 | 一 |
| 凡兆 | 二 | 史邦 | 一 |
| 去来 | 二 | 野水 | 一 |
| 正秀 | 一 | 羽紅 | 一 |
| 半残 | 四 |    |   |

猿蓑集卷之六

幻住菴記

芭蕉州

石山乃奥名向のうらまよふら  
 國分山と云ふれを國分寺の名を  
 傳ふたすへ一林扉の細き流を流  
 して翠巖と云ふ事三曲二百六  
 八幡宮のまじり神傳  
 ハ祓降乃る像とや唯一の家と

甚忌むる事を二部光成和け  
利益益乃塵を同く志たまふ  
又貴く一日比る人の諸さつれハ  
いと神さし物志つゝある傍に位  
捨一草の戸をさし根を軒  
をさしをさしをさしをさしをさし  
ゆ一とをさしをさしをさしをさし  
の僧ありハ勇士菅沼氏曲水子と

伯父よあんたり一を今ハ八年并  
む一とをさしをさしをさしをさし  
のとをさしをさし又市申城さし  
十年并り一とをさしをさしをさし  
身も義忠のふのをさしをさし  
家を離て真羽を歌沼の果をさし  
一とをさしをさしをさしをさし  
く一とをさしをさしをさしをさし

破りてと歳湖水の波は漂  
浮葉の流らまきくさるれ一本  
乃陰多のさしく軒鴛渚あゝ  
ふん垣の結ばあゝお月れ  
初いこりあつたへあやうと  
しとさくやあゝあゝあゝ春  
のうらあゝあゝあゝあゝ  
ふあゝあゝあゝあゝあゝ

程宿りしあは後さゝつちあゝあゝ  
のけあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
南よあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
北風海を渡して涼し日枝の山は良  
れあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

本樵のあり舞のふ田の早苗とる  
奇螢のたふの雲のたふよ水鶴は  
お音義景地とくくめくくく  
れくくくくくくくくくくくく  
わくくくくくくくくくくくく  
いてくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく

ようくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく

く心も先ある時と谷の清水を  
汲み自ら持ちこくのも成備と  
一郊の備いしうりしも昔信さん  
の物よんくしりありし物くみ  
る物よんくしりありし物くみ  
の物よんくしりありし物くみ  
つりさふを築紫と云ふよの備と  
かきんの甲斐にうりし物くみ

洛よの備いしうりし物くみ  
しり額と云ふしりし物くみ  
深く幻住菴のいしうりし物くみ  
草菴の記念と云ふしりし物くみ  
いしうりし物くみしりし物くみ  
いしうりし物くみしりし物くみ  
いしうりし物くみしりし物くみ  
いしうりし物くみしりし物くみ  
いしうりし物くみしりし物くみ  
いしうりし物くみしりし物くみ

里の竹のこたえしきりていのき乃稻  
くしあー兔の巨細よりあや  
家ゆきぬ農談月殿よ山の端よ  
うきよき夜に燈輝よ目を結てい  
新を付ら燈を取ての園雨よ是れ  
をさすいこいこいさしぬよ  
深寂をぬこ山野よ跡をたて舞  
とらぬ心やこ痛み人よ供てを

をいしり人よ似る情年月れ  
移る独と身れ移をとよよよ  
あゝあゝは官念命れ地をさ  
やいしり佛離祖室の扉よ入  
ら舞とせしあゝあゝあゝあゝ  
よあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
暫く生涯のさちあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

くも樂天ハ五嶠く神をやりり老松ハ  
瘦より賢愚又質のこころ  
こころのこころのこころのこころ  
かたしはかたしはかたしは

とるのこころのこころのこころ

題芭蕉翁國分山

幻住菴記之後

何世無隱士以心隱為賢  
也何處無山川風景因人  
義也間讀芭蕉翁幻住菴  
記乃識其賢且知山川得  
其人而益義矣可謂人与  
山川共相得焉迺作鄙章  
一篇歌之曰

琴湖南兮國分嶺

古杏鬱兮綠陰清  
第屋竹椽總數間  
內有佳人獨養生  
滿口錦繡輝山川  
風景依稀入誹城  
此地自古富勝覽  
今日因君尚益榮

元祿庚午仲殊日 震軒具拜

儿右日記

味香此月中ててやる林扉やれ 曲水  
と川をえんれ跡まつるやまの心 野水  
鶏ももしくつめあふ鷓鴣たりく 去来  
海へ五月雨うぬやうとく 亢北  
軒ちらうき名梨やうれ積のあ 千那  
羽脰れやまのやまのやまのやま 珠碩

贈紙帳



おもゆる紙地よりさうりあり

野徑

いんまゝと路のなまよりさうりあり

里東

曇りぬきぬきよりさうりあり

乙羽

顔や津乃中れぬさうりあり

怒誰

多し〜〜帝よりさうりあり

探志

五羽六羽菴よりさうりあり

元志

本つ〜〜水鶏の

泥土

笠あふり根す〜〜月の色

史邦

月結や海を鹿園よりさうりあり

正秀

志つ〜〜粟の葉洗し清水

柳陰

涼〜〜まじりぬきぬき

如行

訪より留らあり

椎のよき〜〜蟬の

朴水

目下や〜〜洗ぬきぬき

市隱

文よ〜〜

後所まや早苗の〜〜涼

半殘

14

15

麦乃粒をよまきらす

一坊にこれや鳥お田のことゝ麦 之道

書音

長崎

一隻入ふとさくらや縁のしる 魯町

夕立や梅木の奥に一とさくら 及肩

昇袿揺掛

梅のや田と山に花をさくら 尚白

贈箋

志くふゆのまゝあゝみのいし 北枝

木履わく侍よりさくら 木節

包紙の書

膳所

縁よすす葉袋や秋の露 扇

指のふくれを佛にまき 智月

石のやけく果下り 羽紅

桶の端をさくらをむす 昌房

里ハくくろくともあつ 何処

啼やいほほほのこゝろ 越人

越人よ向く訪合

筆の交れ借よ飛入菴のれ 等哉

明年弥生尋旧菴

来ぬやよりの星よりたつ 嵐蘭

同其

涼しきしるをよむに於て 曾良

跋

猿蓑者芭蕉翁儕哲之首韻也  
非比<sup>スレニ</sup>彼山寺偷<sup>ニ</sup>衣朝市頂冠笑  
只任<sup>スレニ</sup>心感物写興而已矣洛下  
逸人凡兆去來隨翁遊學棋館  
竹窓躑等凌節斯有歲屬撰此  
集玩弄無已自謂絶<sup>ラク</sup>超<sup>スレ</sup>狐腋白  
裘者也於是四方嗟友幢々往

來或千里寄書々中首有佳句  
日蘊月隆各程文章然有昆仲  
騷士不集錄者索居竄栖為難  
通信且有旄倪婦人不琢磨者  
廉言細語為喜同志雖無至其  
域何棄其人乎哉果分四序作  
六卷故不遑廣搜他家文林也  
維貳元祿四稔卒未仲其掛

錫於洛陽旅亭偶會兆來吟席  
見需記此支題昏尾卒援毫不  
揣拙庶幾一藁高張有補干詞  
海漢人云

風狂野衲

文州漢書

正竹書之

京寺町二条上ル

井筒屋庄其衛板

